

卓越大学院プログラム 令和6年度プログラム実施状況報告書

採択年度	平成30年度	整理番号	1814
機関名	長崎大学	全体責任者（学長）	永安 武
プログラム責任者	北 潔	プログラムコーディネーター	有吉 紅也
プログラム名称	世界を動かすグローバルヘルス人材育成プログラム		

<プログラム進捗状況概要>

1. プログラムの目的・大学の改革構想

○プログラムの目的

グローバル化が進行する中、新興・再興感染症をはじめとする疾病・健康不安が、途上国・先進国等を問わず地球規模課題となり、国際社会が協調して課題解決に取り組む「グローバルヘルス」の推進は、我が国に真の安全と安心、経済発展をもたらすとともに、国際社会における我が国のプレゼンスを高めることにもつながる。グローバルヘルスを推進できる卓越したリーダー育成のニーズは国内外を問わず高まっている。

本申請プログラムは、グローバルヘルス領域でロールモデルとなる多くのトップレベル教員を擁し世界最高峰に位置する英国ロンドン大学衛生・熱帯医学大学院(LSHTM)との緊密かつ有機的なパートナーシップの下、長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス(TMGH)研究科を中核母体とした先進的な学位プログラムを構築し、“世界を動かし地球規模の健康課題を解決できる真に卓越したグローバルヘルス人材”を少数精鋭で育成するものである。具体的な卓越人材像は、地球規模で生じている健康課題を現場レベルで深く理解し、その解決に向けて技術や理論を構築できる教育・研究能力を有するとともに、学術的知見をグローバルな政策立案・実行等に結び付ける能力を兼ね備えた実践的・社会的リーダーである。（調書P.7）

○大学の改革構想

本卓越大学院プログラムは、本学の世界的教育・研究拠点の人材育成面における中心戦略に位置付けられ、学内の既存研究科横断的な教員組織を構築する点、当該領域において世界のトップに位置するLSHTMとのJoint PhD制度を採用する点で、きわめて先進性の高い取り組みである。

この目標を達成し高度な「知のプロフェッショナル」を育成するために、学長の下に新たに「大学院改革推進会議」を創設し、そのリーダーシップにより、社会のニーズに適切かつ戦略的に対応できる新しい学位プログラムの機動的な構築を可能にする大学全体の大学院システム改革を断行する。改革の主要なポイントは、(1)従来の7研究科に閉じた縦割りの教員組織に横ぐしを入れ生命科学、理工学、人文社会科学の3学域に大括り化すること、(2)自前主義を排し大学の枠組みを超えた他教育・研究機関との有機的な協働による学位プログラム（Joint PhDを含む）の構築を可能にすること、及び(3)予算や人員等の学内資源の本プログラムへの重点配分を可能にし、将来にわたる継続性を担保することである。この大学院システム改革は、本プログラムの目標達成にとどまらず、他領域における高度な知のプロフェッショナル育成のための学位プログラム創設にも波及することで、本学全体の将来構想実現に向けた強力なドライビング・フォースとなる。その結果、「プラネタリーヘルス学環」が設置され、本学は次期中期計画の全学目標としてプラネ

（【1814】機関名：長崎大学 プログラム名称：世界を動かすグローバルヘルス人材育成プログラム）

タリーヘルスを掲げることとなった。（調書P. 11）

2. プログラムの進捗状況

- ① 本学の卓越大学院プログラムは、平成30年度の採択以降、各研究科長及びLSHTMからクロスアポイントメントにて雇用した2名の世界的権威を構成員としたグローバルヘルスプログラム運営委員会をはじめ、選考委員会及び合同学務委員会などの委員会にて、規程等を整備し、本プログラム学生及び教育研究支援経費受給者の決定を行うほか、Qualifying Examination (QE) や最終試験に関する審査基準を策定するなど、本プログラムの教育研究面に関する運用基盤を築いてきた。

令和6年度は昨年度に引き続き、事業終了後も継続させる財源の確保、必要な人事及び運営について、長崎大学－LSHTM合同将来構想委員会（steering committee）にて審議を行い、本プログラムの中核である長崎大学－LSHTMジョイントディグリーにおいて今後連携の中心的役割を担う若手教員のLina Madaniyaziが令和7年2月に渡英し、LSHTMの教員・スタッフ等と会談を実施し、同大学で研究中の学生達とも交流を行うなど、補助金受給期間終了後も本プログラムの活動を継続させるための取り組みを行っている。

第6回目を迎える本学及びLSHTMのグローバルヘルスジョイントシンポジウムは、日本医療研究開発機構（AMED）の先進的研究開発戦略センター「ワクチン開発のための世界トップレベル研究開発拠点の形成事業」の協賛を得て、長崎大学感染症研究出島特区ワクチン研究開発拠点との合同シンポジウムとして令和6年9月23日に開催し、将来の新興感染症に対してレジリエントなグローバル社会の構築に向けたディスカッションが行われた。本プログラム学生はポスターセッション等で自らの研究内容を発表し、ワクチン研究や公衆衛生分野等の国際的な専門家と積極的な意見交換を行った。

また、令和6年11月18～22日には、保健医療システム・政策分野で最も権威ある国際会議「The 8th Global Symposium on Health Systems Research 2024 (HSR2024)」を本学と国際協力機構（JICA）との共同ホストにより長崎県において開催することができ、グローバルヘルス分野の教育と研究において多くの成果を持つ長崎大学として学際的な広がりをもっと進める機会となり、本プログラム学生も国際会議の運営等に携わる機会を得ることができた。

令和6年度に決定したプログラム正規生は9名で、3月末時点で32名の正規生が在籍しており、9名が修了し、グローバルヘルス分野において国際的に活躍する人材を輩出した。

本プログラムの中核でもある長崎大学－ロンドン大学衛生・熱帯医学大学院国際連携グローバルヘルス専攻（JD専攻）の入試では、5名の定員に対して、31名が志願し、倍率が6.2 倍であった。

- ② プログラム学生の質を保証するため、LSHTMの運用を活用し設定したQE審査基準及び評価基準に基づき、7月～9月にかけて12名の候補生を含むプログラム学生に対してQEを実施し、9名が合格した。さらに、最終試験についてもLSHTMのシステムを活用し設定した審査基準及び評価基準に基づき、7名のプログラム学生に対する最終試験を実施した。

各プログラム学生が、同分野もしくは関連領域を専門とした世界的に業績が優れている教員（QE審査員）よりコメントやアドバイスを受け、研究計画をより高度な内容へと展開することを目的とした「QEシステム」については、従来より専門性が高く、かつ中立的な審査を目的として、外部審査員を中心に構成されており、このような研究資格審査のあり方は研究・教育レベルの向上につながるため、全学的に普及しつつある。

- ③ 令和6年9月23日開催のシンポジウムでは招聘教員及び本プログラム受講生からのプレゼンテーションやディスカッションのほか、ポスターセッションをプログラムに設け、各研究テーマに対する討論が活発に行われた。また、LSHTMの運営に携わる教員がプログラム学生の研究発表に関するグループワークに入り、指導教員、プログラム学生と研究に関する意見交換を行った。

なお、昨年度に引き続きLSHTMとのクロスアポイントメントで雇用されている教員が、長崎大学病院にて臨床医を対象に、フィリピンのサンラザロ病院とのオンラインカンファレンスを実施、LSHTMで使用しているオンラインシステム(Moodle)の活用法等、グローバルヘルス教育研究に係るFDを実施した。

④ プログラム3年目、4年目及び5年目に在籍する学生の殆どが海外を基盤として研究を実施しており、本学の海外拠点やLSHTMの研究サイトを活用し、データ、サンプル収集を行う過程において、本学教員をはじめとした、指導チームの下で、連携先教員及び現地スタッフとの連携・協力を得ながら、課題とする研究テーマに沿って実践的かつ効率的な研究指導が行われた。さらにLSHTMと本学からなる2名以上によるチーム指導を実質的なものとするため、また、喫緊の課題に対応するフィールドリサーチに資するために、各指導教員チームに対し、当該プログラム学生の研究を支援する研究指導経費を配分した。

⑤ 引き続きLSHTM講師陣（常駐教授1名を含むクロスアポイントメント教員計8名）、国内外の国際レベルの連携教員及び招聘講師（NCGM、国立感染症研究所他、国内外の大学等より約80名）が、日本人学生と多様な文化的背景をもつアジア・アフリカの留学生に対して国際水準の講義を実施している。特に、疫学及び統計学の講義については、国際的に評価の高いLSHTMの疫学・統計教育資材を授業に取り入れ、LSHTMと同等レベルで講義を実施している。

また、熱帯医学の授業においては、本学とLSHTMの両大学が協働で開発してきた、アジアの健康課題に重点を置いた熱帯医学専門医養成プログラムの要素を取り込んでいる。当該プログラムは、米国熱帯医学・衛生学会からも公認された内容となっており、全体を通して卓越した教育研究内容で構成されている。

⑥ 令和6年9月23日開催のシンポジウムでは、LSHTMから感染症理論疫学の世界的権威である教員やAMEDの先進的研究開発戦略センターのセンター長、さがけ事業（パンデミック社会基盤）研究領域の研究総括の研究者等、新興感染症のトップを招聘し、講演のほかパネルディスカッションを行い、活発な意見交換が行われた。

また、令和6年11月18～22日に開催した国際シンポジウム「The 8th Global Symposium on Health Systems Research 2024 (HSR2024)」は、保健医療制度の世界最大の学会組織であるHealth Systems Global (HSG) が2年毎に開催する世界規模のシンポジウムで、保健医療制度や政策について科学的な視点、実務的な視点から議論を交わす他に類を見ない規模の国際的な会議であり、保健行政、研究機関、国連機関、NGO等で保健政策と保健システムの研究に関わる研究者、意思決定者、実施者ら1,500人以上、100か国以上からの参加があった。プログラム学生は当該シンポジウムでボランティアの運営アシスタントとして参加し、学術的知見をグローバルな政策立案・実行等に結び付ける能力を兼ね備えた実践的・社会的リーダーを育成するという当該プログラムの目標を達成するうえで、貴重な機会を得た。

⑦ 博士後期課程に在籍する本プログラム正規生への経済的な支援については、毎月の研究支援経費による基盤的支給と、研究指導チームに配分する研究指導経費により、資金面においても計画的に研究が実施できるよう配慮している。加えて、博士後期課程に在籍する本プログラムの候補生については、教育研究支援経費の支給を行っている。他の奨学金給付等、経済支援を受けていないプログラム正規生については、教育研究支援経費20万円／月を支給し、候補学生については10万円／月を支給した。

⑧ 本プログラムの円滑な運営を図るため、高い英語力をもつ事務補佐員及び戦略職員を配置し、複数研究科と国籍から成る卓越大学院プログラム受講生の身分異動の把握やカリキュラムの調整のほかLSHTMスタッフとの調整等の教務・学生支援体制を整備した。

⑨ グローバルヘルスと親和性が高い研究や、大学院生の教育支援につながる研究への支援並びに医学・保健学系分野における学際的な教育研究交流の

促進を目的に、グローバルヘルス研究支援グラントの公募を行った結果、18件の応募があり、プログラム責任者、プログラムコーディネーター、対象研究科から選出された審査員で構成した審査会にて7件を採択した。

【令和6年度実績：大学院教育全体の改革への取組状況】

・本事業を通じた大学院教育全体の改革への取組状況及び次年度以降の見通しについて

本学の医療科学系以外の教員をグローバルヘルス分野の教育研究に繋げる新たな取組みとして「グローバルヘルス研究支援グラント」を令和2年度に創設し、令和6年度には主領域から派生したグローバルヘルスの萌芽研究から18件が申請され、7件が採択された。採択を受けた各研究科の教員はプログラム担当教員としてLSHTMとの共同研究及び日英のシンポジウムに参画しており、LSHTMと長崎大学の将来構想委員会であるsteering committeeの構成員として、継続性、発展性をもった本プログラムに関する審議を行う。本steering committeeを起点として各研究科の強みを糾合した第2のJoint PhDを検討している。

また、学長のリーダーシップのもと学内7研究科を生命医科学域、人文社会科学域、総合生産科学域の3つの学域にまとめる改革が進行しているなかで、グローバルヘルスの本質は学際性にあることから、学長のアクションプラン2020-2023でTMGH研究科が掲げている学位（Doctor of Public Health (DrPH)）では、これらの3学域が重なる領域を「プラネタリーヘルス学環」として位置付け、現場レベルでの実務家リーダー要請に向けて令和6年10月までに15名の学生が入学している。

民間企業との連携については、既に本学熱帯医学研究所に創設された塩野義製薬の寄附講座の教員が本プログラムの教育研究を担当している。令和6年9月23日開催のシンポジウムは、本学卓越大学院プログラムと感染症研究出島特区ワクチン研究開発拠点の合同で開催し、LSHTMから感染症理論疫学の世界的権威である教員やAMEDの先進的研究開発戦略センターのセンター長、さがけ事業（パンデミック社会基盤）研究領域の研究総括の研究者等、新興感染症のトップを招聘し、講演のほかパネルディスカッションを行った。次年度においても、感染症研究出島特区ワクチン研究開発拠点と連携しシンポジウムを実施する予定である。

また、本プログラムの国際共同学位及び感染症領域におけるコロナ禍の貢献が認められ長崎招致に成功した国際シンポジウム「The 8th Global Symposium on Health Systems Research 2024 (HSR2024)」では、令和6年11月18～22日に世界トップのグローバルヘルス国際会議を長崎の地で開催することができ、研究者、意思決定者、実施者ら1,500人以上、100か国以上からの参加があった。